

岡崎むかし館

かみ ひな 紙のお雛さま

掛け軸



岡崎むかし館 蔵

起こし絵(玩具絵)



岡崎むかし館 蔵

3月3日の上巳じょうしの節句せっくは、桃の花が咲く時期と重なることから桃の節句とも呼ばれ、雛まつりの日として、雛人形を飾り、女の子の健やかな成長と幸せを願いお祝いをします。古くから年中行事として位置づけられ、日本人のくらしの中で節目の行事として親しまれていますが、現在のような雛まつりの原型ができあがったのは江戸時代の延宝年間えんぼう(1673-1681)頃と考えられています。

各家庭における雛まつりでは、様々な形態の雛人形が飾られますが、きれいな衣装をつけた人形、豪華な段飾りの他に、掛け軸や土人形なども雛飾りとしてお祝いに贈られました。昭和初期頃には、印刷されたお雛さまの掛け軸が、安価で飾る場所を要しないため、庶民の間で普及しました。

また、子どもたちに親しまれた紙のお雛さまとして、江戸時代末から明治に流行した玩具絵おもちゃえがありました。厚紙などに印刷された、建物や人形などを切り抜き、のりで台紙上に貼りつけて立体的に仕上げた楽しむものを、起こし絵、または立版古たてばんこと呼び、お雛さまもその題材として人気がありました。その後も、紙に印刷された人形を切り抜いて遊ぶ玩具絵は、子どもの玩具として駄菓子屋さんなどで売られていましたが、現在ではあまり見られなくなりました。

雛まつり自体も、近年では観光の催事として各地で大規模に行われるようになり、以前とは少し様変わりをしています。雛飾りをとおして子の健やかな成長を祈る思いは昔も今も変わることなく続いています。